JA共済

JA共済 地域貢献活動

PROJECT STORY

VOL.02

新潟県　JAえちご中越

［JA子育て支援「あぐりんこ」］

令和5年3月

農業のために
地域のために
明日のために
JA共済の
地域貢献活動

©2017 JA-KYOSAI

JAならではの食育活動を通じて お母さんたちに交流の場を提供したい

子どもと一緒に安心して参加できる料理教室を毎月開催

新潟県のJAえちご中越は、地域のお母さんたちを応援する活動に取り組んでいます。
平成26年にJA子育て支援「あぐりんこ」の活動を立ち上げ、
小さな子どもを育てるお母さんを対象に地域の特産物を使った料理教室を開催。
育児に時間を費やすことで社会との接点が希薄になってしまうお母さんに、
地域とつながる交流の場とリフレッシュの機会を提供しています。
JA共済連は「地域・農業活性化積立金」を活用してこの取組みを支援し、
地域に根ざした息の長い活動になるよう支え続けています。

JAえちご中越
さんとう営農センター
農政企画課
清水かおりさん

×

JA共済連 新潟県本部
事業企画部
普及管理グループ 主任
萩野香織さん

「なぜJAが子育て支援?」戸惑いからのスタート

令和５年２月１日、新潟県中越地区の４つのJAが合併し、新たにJAえちご中越が誕生しました。中越地区は日本海沿岸部から内陸の山間部にまたがる自然豊かなエリアで、各地の多彩な風土が育むお米や野菜、果樹、花きなど、幅広い品目を生産しています。

合併した４つのJAのうち、長岡市と三島郡の一部を管轄する旧JA越後さんとうでは、平成26年5月からJA子育て支援「あぐりんこ」の活動を続けてきました。その取組みは、一人のJA職員が地域の人たちの声に耳を傾け、それまで見過ごされてきた課題を発見したことから始まりました。その職員とは、「あぐりんこ」の立ち上げ当初からこの活動を担当するJAえちご中越 農政企画課の清水かおりさんです。

９年前のある日、清水さんは日頃から交流のあった組合員の佐藤享子さんから、JAが取り組む地域貢献活動についてこんな相談を受けたと言います。

「地域の若いお母さんたちと、子育てで困っていることや悩みを話し合う機会があるんだけど、清水さんも参加してくれないかな」

しかしその時の清水さんは、「地域貢献活動」と「子育て」がどう結びつくのか、正直なところピンときませんでした。近隣のJAで子育て支援に取り組んでいる事例はあまりなく、周囲に聞いても「子育て支援は行政の仕事でしょ？」という反応ばかり。それでも新しい取組みのきっかけになればと考え、話し合いに参加した清水さんは、地域で子育てをするお母さんたちが抱える課題や悩みを初めて耳にすることになったのです。

社会との接点が希薄になっている地域のお母さんたちの厳しい現状を実感

話し合いの中で清水さんの印象に最も強く残ったのは、「子育て中のお母さんたちは社会とかかわる機会が少ない」という課題でした。例えば料理を習いたくても、乳幼児を連れて参加できる教室がない。かといって、保育園や幼稚園に入るまでは子どもを預ける場所もない。だから子どもが小さいうちは家族以外との交流がなくなり、孤立感を抱きやすい――。これが地域のお母さんたちを取り巻く現状でした。

当初は「なぜJAが子育て支援？」と戸惑っていた清水さんも、地域のお母さんたちが抱える事情を知って「目から鱗が落ちる思いでした」と振り返ります。そして、地域に密着しているJAだからこそできる支援の形があるのではないかと考え、自分たちも動き出そうと決意したのです。

活動を企画するにあたって清水さんがこだわったポイントは2つあります。

1つめは、行政の子育て支援とは違ったJAならではの取組みにすることです。話し合いの中で「子どもと一緒に何かを学べる場があれば嬉しい」との意見が出たことを受け、清水さんは地域のお母さんたちを対象とした料理教室を企画。お母さん同士の交流の場を提供するとともに、地場野菜や旬の食材を使ったメニューや郷土料理の調理法を伝え、若い世代が食と農への理解を深める場にしたいと考えました。

活動開始当初を振り返る佐藤さん（左）と清水さん（右）

地場野菜や旬の食材を使った講習を通じて交流と学びの場を提供

もう1つは、小さな子どもと一緒でも、お母さんが安心して気軽に参加できる場にすること。そこで佐藤さんを始め、清水さんの想いに共感した地域の人たちに協力をお願いし、会場内を見守る「子育てサポーター」を配置することに。子育てサポーターが必要に応じて子どもの世話をすることで、参加者が料理に集中できる環境を用意しました。

こうしてお母さんたちの声を反映した「あぐりんこ」の活動は、試験的に実施した2度のプレイベントを経て、本格始動しました。以来、毎月1回のペースで料理教室の開催を続けています。

JA共済の地域・農業活性化積立金で多彩な食材を使った調理が可能に

とはいえ活動がスタートしてからも、軌道に乗るまでは様々な苦労がありました。県内でも前例がない取組みだったため、当初は何もかも手探り状態。例えば会場となる営農センターの会議室は調理施設ではないので、料理教室の前日から清水さんを始めとするJA職員が準備に入り、水洗いや加熱が必要な作業をあらかじめ済ませなければいけません。

また「JAならではの料理教室」にするには、地元で採れる多種多様な農畜産物や新潟の伝統的な食材など、多岐に渡る材料を毎回用意する必要があります。そこで活動をより充実させるために役立ったのが、JA共済連の「地域・農業活性化積立金」でした。

JA共済連新潟県本部では平成28年度からこの助成金を活用し、「あぐりんこ」の活動を支えてきました。県本部で地域貢献活動を担当する萩野香織さんは、「地産地消を取り入れた農畜産物のPRと、次世代との接点作りにつながること」を支援の理由に挙げます。

「高齢者向けの料理教室を行うJAは多いのですが、お母さんが対象のものは『あぐりんこ』が県内初です。最近は他のJAでも同様の取組みが増えていますが、その先駆けとなった点でも意義があります」

食材の水洗いや加熱等必要な調理過程を事前に済ませるJA職員たち

また萩野さんは、一人の母親としても「あぐりんこ」の活動に共感を寄せます。

「私も育休中は社会との接点がなくなり、閉塞感を覚えることも多かったので、『あぐりんこ』のような場が身近にあったらぜひ参加したかった。子育てを経験した立場としても、今の時代に必要な取組みだと感じますし、この素晴らしい活動を支援できて私自身も大変嬉しく思います」

お母さんと子どもの双方にとって同世代と交流する貴重な場を提供

立ち上げ当初は試行錯誤が続いた「あぐりんこ」の活動も、今ではすっかり地域に根付いています。初めは参加者を集めるのに苦労した時期もありましたが、告知のチラシをポスティングするなど地道な案内を続けるうちに参加者が増え、毎回20組超の親子が集まるように。現在はLINEグループへの登録制とし、会員数は44名。子どもが保育園や幼稚園に入ると社会復帰するお母さんが多く、会員は随時入れ替わります。今はコロナ禍の影響もあり、参加者の定員を10組程度に減らしているためすぐに枠が埋まり、キャンセル待ちが出る回もあるほどです。

JA共済連の萩野さんも、JAの地域貢献活動を支援する手応えを感じています。

「地域に密着したJAは、地元の人たちの声を活動に反映できるのが強み。『あぐりんこ』はまさに地域のお母さんたちの声に応えた活動で、それを私たちが応援することでJA共済連も地域活性化に貢献できる。JAグループとして理想的な連携の形だと思います」

「次世代につなぐという意味でも子育て支援は重要です」と語る萩野さん

子育てサポーターが子どもを預かるのでお母さんたちも安心です

令和5年1月20日。合併を直後に控えたJA越後さんとう営農センターで、「あぐりんこ」の料理教室が開催されました。

会場にやってきた親子を「おはようございます！」「よく来たね～」と明るく出迎えるのは、佐藤さんを始めとする子育てサポーターの皆さん。さっそく子どもを預かり、室内に用意したキッズスペースで一緒に遊んだり、抱っこやおんぶをしてあやし始めました。

参加者の一人は「普段は子どもと離れる時間がないので、託児できるのは本当にありがたい。おかげで料理に集中できたし、同世代のママとおしゃべりもできて、いい気分転換になりました」と笑顔を見せました。

一方の子どもたちも、おもちゃの電車を走らせたり、遊具の中に入ってかくれんぼしたりと、楽しくにぎやかに遊び回っています。保育園や幼稚園に上がる前は同年代の友達と交流する機会が少ないため、「あぐりんこ」は子どもたちにとっても、地域の中で交流を広げる大事な場となっています。

これまで接点のなかった若い世代がJAに親しみを持つきっかけに

地元の農畜産物や伝統的な食文化に関心を深める参加者も増えています。この日も「前回の講習で長岡野菜の『糸瓜』を初めて知った」「郷土食の笹団子の作り方を教えてもらったので、家でも手作りしたら家族が喜んでくれた」などの声が聞かれました。

さらには若い世代がJAに親しみを感じるきっかけ作りにもなっています。「調理実習で使った地場野菜を買いに、JAの直売所へ寄ってくださる方も多いですよ」と清水さん。ある参加者は、「以前は直売所があることも知らなかったのですが、行ってみたら地元産の農畜産物や加工品がたくさん売っていて、その充実ぶりにびっくり。今ではしょっちゅう直売所で買い物をしています」と話します。

またJAのイメージが変わったという声も多く、あるお母さんは「JAは農家のための組織だと思っていたので、農家ではない自分でもこうして参加できる活動があると知り、JAを身近に感じるようになりました」と話してくれました。

JA共済連の萩野さんも「地域の人たちに喜ばれる取組みを地道に続ければJAのファンが増え、職員も自分たちの仕事に誇りを持てるようになり、JA全体が活気づくはず」とこの取組みにエールを送ります。

「あぐりんこ」の活動は、合併後もJAえちご中越として継続することが決まっています。

「これを機に子育て支援の輪をさらに広げて頂けたらと期待しています。県本部でも他地区にこの事例を紹介するなどして活動の広域化を後押しし、JAえちご中越の活動がより充実するように支援したいです」と話す萩野さん。清水さんも「活動を継続する上で、JA共済連の支援はなくてはならないもの。助成金を活用できて大変ありがたく思っています」と話し、今後に向けた決意をこう語ります。

「『あぐりんこ』が目指すのは“地域の拠りどころ”となるコミュニティ作りです。お母さん同士が育児の悩みを相談し合っている様子などを見ると、お母さんにとって頼れる場になりつつあるのかなと手応えを感じます。今後はさらに交流を広げ、地域に必要とされる活動であり続けるように努めたいと思います」

これからもJAとJA共済連が協力し、地域のお母さんたちを応援していきます。

取材協力者のご紹介

JAえちご中越
さんとう営農センター
農政企画課
清水かおりさん

［経歴］

平成18年　JA越後さんとう　入組
　　こしじ地区営農センター
平成31年　営農部営農生活課
令和 5年　JAえちご中越
　　さんとう営農センター
　　農政企画課

［この活動を通じて感じたこと］

子ども連れでも安心して参加でき、学びやスキルアップにつながる場が、育児中の女性たちに求められていると強く感じます。

［地元の好きなところ］

新潟は海あり、山あり、おいしいものありの米どころ。地元産のお米のおいしさを感じています。

［休日の過ごし方］

デパ地下や道の駅などに出かけて、話題のものや新商品を体験します。そこで仕入れた情報が食育講座の企画に役立つこともよくあります。

JA共済連 新潟県本部
事業企画部
普及管理グループ 主任
萩野香織さん

［経歴］

平成 7年　入会　業務部 契約課
平成15年　普及部 普及企画グループ
平成18年　業務部 業務指導グループ
令和 2年　普及部 研修グループ
令和 4年　事業企画部
　　普及管理グループ

［この活動を通じて感じたこと］

小さなお子さんを抱える女性は、息抜きすらできないことも多いので、親子で楽しめる場を提供する活動は大変意義があると感じます。

［地元の好きなところ］

食べ物がおいしいところ。全国的に有名なお米や日本酒はもちろん、お寿司やラーメンなどさまざまな料理の名店がたくさんあります。

［休日の過ごし方］

時間がある時は映画や演奏会に出かけます。とは言えコレといった趣味がないので、おすすめの趣味があれば誰か私に教えてください（笑）

JA子育て支援「あぐりんこ」の概要

活動の背景

- 育児に時間を費やすことで、社会との接点や交流機会の減少に悩む地域のお母さんが増加。
- 地域のお母さんに対し、行政の支援とは別のサポートが求められていた。

活動の内容

- 若いお母さんたちの「子ども連れで学べる場が欲しい」との声を受け、JAならではの「食と農を取り入れた子育て支援」を検討。
- 平成26年5月よりJA子育て支援「あぐりんこ」の活動を開始し、育児中のお母さんを対象とした調理実習や食育講座を月に1度開催。
- 講習中はボランティアの「子育てサポーター」が会場を見守り、小さな子どもが一緒でも安心して参加できる環境を用意。
- 家計の負担にならないよう、参加費は材料費程度に。JA共済の「地域・農業活性化積立金」を活用して食材の充実を図り、地場野菜を使ったメニューや郷土料理を取り入れることで、地域のお母さんたちに学びを通じた交流の場を提供している。

活動の成果

- 令和5年で活動は10年目を迎え、地域のお母さんたちに取組みが浸透し、毎回20組を超える親子が参加。（コロナ禍以降は参加人数を抑制中）
- 地場野菜を使った調理実習や郷土料理の講習を行うことで、地域農業への理解促進やJAのファンづくりにもつながっている。

活動のポイント

①	②	③
地域に密着したJAだからできた見過ごされがちな課題の発見	組合員からの提案に応えてすぐに活動を立ち上げた実行力	ボランティアなどの地域住民も広く巻き込んだ取組み

［新潟県 JAえちご中越］

JAえちご中越は、令和5年2月1日に新潟県の中央部に位置する中越地区4JA（JA越後ながおか・JA越後さんとう・JAにいがた南蒲・JA柏崎）の合併により発足。5市2町1村を管内とし、海あり山あり平野ありの広域JAです。日本一の米どころ新潟県の真ん中に位置し、大河 信濃川から豊かな恵みを受ける米の産地です。

〈 JAえちご中越　概況 〉

- 組合員数　約76,400名（うち正組合員数 約37,400名）令和4年7月末
- 職員数　1,699名
- 主な農産物　米・枝豆・レンコン・いちご・もも・ぶどう・ルレクチェ・花ハス等

「JA共済 地域貢献活動 PROJECT STORY」は
今後もシリーズとして発行を予定しています。
同取組みを動画で紹介している
「一緒に地域を咲かせよう」もぜひご覧ください。

県域独自の地域貢献活動を動画で紹介
「一緒に地域を咲かせよう」

JA共済　咲かせよう　検索

▶ https://social.ja-kyosai.or.jp/prefecture_case/

編集後記

お母さん同士の交流だけではなく、地元特産物・郷土料理の継承にも繋がるJAらしい取組みが印象的でした。
お母さん方が活動への参加を通じて直売所に寄ってくれるようになるなど、JAと地域の方を繋ぐ架け橋にもなる取組みですね。
本記事へのご感想や取材のご要望などございましたら、お気軽にご連絡ください。
（西川・鈴木）

発行：JA共済連 全国本部 農業・地域活動支援部